

地域社会との交流による日本語会話練習

—多文化共生の時代に日本語教員としてできること—

本田 明子

1 はじめに

近年、地方の大学・短大等において、積極的な留学生の受け入れが行われるようになった。なかには、日本人学生と留学生の比率が1:1というような短大もあるという（梶原2003）。

筆者の勤務校も、2000年4月に大分県別府市に設立されたが、開学当初から、日本人学生と留学生が50%ずつとなることを目標としており、4年生までのすべての学生がそろった2003年10月現在で、ほぼその目標を達成している。在籍中の留学生の出身は、66の国と地域にわたり、その数は1600名を越す。これは約12万人の別府市の人口の1%強にあたる数字となる。1%というと非常に少ないように思われるかもしれないが、都市部とは違いせまい地域の中に生活していると、どこに行っても必ず留学生の姿を見かけるほど、実生活において留学生の多さは数字以上のものを感じられる。

このような状況の中で、留学生はもちろん、受け入れる地域の住民の側にもとまどいが見られるのが現状である。こうした例はやや特殊なものであるかもしれないが、地方の大学で大規模に留学生を受け入れたとき、東京や大阪といった大都市圏とは違った問題がおこりうるという点で共通の要素があるのではないと思う。本稿では、こうした多文化社会の進行とともにおこりうる問題を示すとともに留学生と地域社会との交流をはかるために日本語教員として何ができるのかと自問しつつ始めたささやかな実践を報告したい。

2 留学生をめぐる問題

2.1 留学生の環境

筆者の勤務する大学は、2000年4月大分県別府市に設立された。その所在地は市の西側に位置する山の頂上近くであり、市の中心部からバスで40分ほ

どこかかる不便なところである。留学生は入学後1年は、留学生のための寮で生活する。不便なうえ、往復のバス代が留学生にとっては高額なため、寮に住む留学生が別府市内へ出かけることはあまりない。

また、66カ国・地域からの留学生が集まって生活するため、そこでの共通語は英語となり、英語を母語としない留学生はまず英語の習得をめざす。

日本語は必修で、入学後2年間の学習で、専門講義を日本語で受講できるレベル（日本語能力試験1級80%）に到達することが目標とされている。しかし、英語でも開講される授業があり、日本語をまったく知らなくても英語の能力のみで評価されて入学できるため、日本語学習の動機は非常に低い。それどころか、この大学に入学すると、日本語を学習することが義務付けられることをまったく知らず、日本語を学習する意思を持たずに入学してきた留学生も少なくない。また、2年間の日本語学習中は英語で専門の講義を受講しており、日本語の学習は留学生にとって大きな負担となっている。

2.2 地域住民の環境

別府市は温泉で有名な国際的な観光地とはいえ、一定の期間定住する外国人の数は少ない。この大学の開学前の外国人登録者数は700～800名程度で、その8割強が中国および韓国・朝鮮の出身者であった（別府市役所市民課の資料による）。

そのため、市民の間には急激に増加する留学生（外国人）に対するとまどいもみられる。あるケニア人の学生は、町にでると年輩の市民にじっと見られたり、顔を触られたりと、非常に不快な経験をしたという。また、あるインドネシアから来た学生は、友人と英語で話していてにらまれたり、つばを吐きかけられたり、塩をまかれたりした経験があるという。インドからの学生のひとりもスーパーで年配の女性に「どうしてこんなところにいるの。山の上に帰って」と言われたことがあると話していた。

筆者も、近所の主婦と話したおりに、「この近くの港にも外国の船が来て、黒い人たちがお金がないから町にいかないでその公園で座ってたりするんでこわいですよ。別府はけっこう国際的な町なんです」というのを聞き、黒

い人がいるから国際的という感覚に違和感を抱いた覚えがある。

このような留学生、地元の人々双方の状況から、両者が互いの交流を深め、相互理解を進める必要があるのではないかと考え、始めたのが以下に紹介する市民ボランティアの協力による会話練習の授業である。

3 ボランティアの協力による会話練習授業

3.1 目的

この会話練習の目的は以下のようなものである。

- ・留学生たちが日常接することの少ない地域の人々との交流を深める。それにより日本語学習への意欲をもたせる。
- ・地域の人との個々の交流を通じて、日本社会や文化への興味を抱かせる。
- ・地域で話されている自然な日本語に触れる。
- ・地域の人の大学や留学生に対する親近感を深める。
- ・地域の人の留学生への理解を促す。

3.2 地域の人々による会話練習ボランティアグループの概要

ここで「地域の人々による会話練習ボランティアグループ」と呼ぶのは、厳密に言えばグループではない。会話練習への協力の呼びかけに応えてくれた個々の人々を便宜上ボランティアグループと呼んでいるにすぎない。したがって、このグループがまとまって活動を行うというようなことはない。

このグループの始まりは、2000年の秋に、市の公民館主催の「家庭教育チャレンジ学級」「ふれあいボランティア女性学級」が、大学見学を実施した際に筆者が案内役を務めた縁による。そのとき集まった90名ほどに、留学生の会話練習のお手伝いを呼びかけたところ、30名近い協力の申し出があった。これをもとに2000年12月から授業のなかでの実践を始め、会を重ねるごとに協力者が増え、現在名簿に登録されているのは91名（女性79名、男性12名）となっている。

この91名は、公民館主催の家庭教育学級に参加した主婦、英語教室の仲間、定年退職（教員退職者が多い）後の年配者等である。

しかし、実際の会話練習に会話相手として協力するのは多いときで30名、少ないときで15名ほどであり、平均すると各回20名前後となる。一度しか協力していないという名簿搭載者も多いが、今回は協力できないからと友人に紹介する例も多く、留学生への理解の輪を広げるためには何らかの役に立っているものと思われる。

3.3 授業の概要

この地域の人々の協力による会話練習の授業は、日本語入門・Ⅰというコースの授業のなかで行っている。これは1年生のうち、学習歴ゼロの初級者から学習歴3ヶ月程度（日本語能力試験4級80%未満）の留学生（以下、学生とする）が受講するコースである。このコースは1日2コマ（1コマは95分）週4日の授業があり、1学期（4か月）で終了する。

会話練習の授業は1学期に3回ほどの頻度で通常の1コマ（95分）を使って行っている。何度かの試行錯誤ののち、現在は以下のような内容でこの授業を進めている。

- ・1回目（学期開始後1ヵ月程度）—大学紹介ビデオを用いた口頭発表会

このコースで現在使用中のテキスト（大学独自に作成したもの）には、学生がキャンパス紹介のビデオを作るというタスクがある。このタスクで学生は、小グループに分かれ、台本を作り、カメラマンとレポーター役を決め、ビデオを撮影する（撮影は授業時間外に行う）。この段階で学生が使用できるのは、「ここは食堂です」「ここにジムがあります」などの初歩的な文型であり、こうした文型を使った5～10分程度のビデオが完成する。

ボランティアの協力による学期最初の会話練習授業では、このビデオを使って、口頭発表会を行う。学生はグループごとに自分たちの作ったビデオを見せるが、その前後にビデオのうまくできた点、失敗した点、ビデオをとった感想などを一人ずつ発表する。

地域のボランティアには聴衆兼審査員として協力してもらう。発表後、グループに分かれ、質疑応答の時間を設ける。クラスのなかだけでの発表に比

べて緊張感が増し、わかりやすく発表するための努力をするようになる。また、発表を聞いた地域ボランティアのコメントには好意的なものが多く、学生の意欲を高める効果がある。このようなボランティアの審査やコメントは学習の動機付けとしてのみ用いるもので、成績に関わる評価は担当教員が行う。

・ 2 回目（学期開始後 2 か月程度）—小グループでの会話練習

あらかじめテーマを決め、学生にインタビューシートなどを準備しておく。地域のボランティア 1、2 名、学生 2、3 名のグループに分かれ、自己紹介、学生のインタビュー等を行う。インタビューのテーマは文化、生活、趣味などさまざまだが、学習中の文法項目が使えるような質問を用意させる。

なかでも、敬語の練習は、学生に敬語の必要性を感じさせ、学習の動機付けにも実際の練習としても役立っている。

・ 3 回目（学期開始後 3 ヶ月半程度）—ポスターセッション方式

これは国の文化の紹介といったテーマを決め、それぞれのグループがブースを準備して待機しているところに、地域の人々が回って行って説明を聞くというものである。

ポスターセッション方式といっても、ポスターだけではなく、実際に料理を作って、作り方の紹介をしたり、コンピューター（パワーポイント）を使って紹介したりという形もある。それぞれ自分のブースに多くの人を集めようと、民族衣装を着たり、ハンドアウトや料理を準備したりと工夫を凝らし楽しみながら準備をしている。

地域ボランティアの来学は、1 学期に 3 回ではあるが、学生はその前後に、事前の準備、授業後の報告と反省、お礼状書きなどの活動を行っている。

例として、2003 年春学期 2 回目（6 月 17 日）の授業とその前後の活動を紹介したい。この授業の学習項目は「敬語」である。

会話学習授業の 1 週間ほど前に、通常の授業の中で教科書を用いて、敬語（尊敬語）の導入をした。この時点で留学生は、来る—い—ら—っ—し—や—る、食—べ—る

一召し上がる等の尊敬語の形をおぼえ、どのようなときに敬語を使うかの説明を受ける。その後、地域の人々への質問したいことを考え、敬語の質問文を作る。このときすでに1度、地域の人々との会話を経験していたので、ある程度相手を思い浮かべながら質問文を作ることができた。教員は学生の作ったものに目を通し、失礼にあたる質問がないかどうかと、大きな文法的誤りがないかどうかを確認しておく（このとき失礼な質問があれば、学生全体に示し、なぜ失礼かを考え、各国の文化的背景などを話し合う）。

会話練習授業の当日は、学生は出身国と呼び名を書いた名札（厚紙に両面テープを貼ったもの）をつける。この名札は地域のボランティアにもつけてもらう。ボランティアに対し、会話練習の目的と内容を簡単に説明した後、学生3、4人に対し、ボランティア2名程度のグループに分け、自己紹介、質問応答の会話練習を始める。6月17日は2クラス30名ほどの学生に対し、ボランティア参加者は19名であった。

各グループ通り質問が終わったところ、グループ交替をして、すべての学生がすべての参加者と会話できるようにする。この質問応答は1問1答では終わらず、多くの場合、ボランティア側からの質問の聞き返し、学生側の言い直し、わからない日本語について質問し教えてもらう等のやりとりで発展していくため、最初の質問応答が終わるまで30分程度かかる。そして、次に違う相手に同じ質問を繰り返すことになるので、はじめの質問のときうまくいかなかった点を修正して質問することになり、学習内容の定着を図ることができる。

この質問応答の会話のなかで、学生には地域の人々の住所またはメールアドレスを聞いておくように指示した。その後の授業で、各自相手を決めてお礼状を書くためである。

この6月19日の会話練習授業の際には、地域ボランティアの一人が、近所に呼びかけていらなくなったゆかたを集め、女子学生全員と男子学生の一部にプレゼントしてくれ、学生たちは授業後にゆかたの着付けを習うこともできた。このこともあって、その後のお礼状から、次回会話練習の自国の文化を紹介するグループ発表へとスムーズに進むことができた。

翌日以降の授業では、尊敬語に対する謙譲語の使い方とはがきの書き方を学習し、謙譲表現を使ったお礼状を書かせた。この一連の活動を通じて、日常あまり日本人と接することのない学生たちに敬語を使う場面と意義を感じさせることができたと思う。

授業後の活動としてはお礼状のほかに、質問した内容を報告書の形でまとめさせたり、日本について初めて知ったことなどというテーマで作文を書かせたりといったことも行っている。

3.4 会話練習授業の成果

こうしたボランティアの協力による授業をはじめて行うのは、学生たちが来日して1ヵ月ほどたったころである。この最初の授業の後には、「はじめて日本人と話しました」という学生が何人かいる。実際には日本語教員や大学職員などの日本人と接しているはずなのだが、日本人と意識して話さなければならない日本人とは初めて話したという意味なのだと思う。このことからこの大学の学生が日本にいながら日常的に日本人と接することがいかに少ないかがわかる。

2000年秋学期から2003年春学期まで、この会話練習授業を受講したのは、筆者が担当したクラスの学生144名と時に応じて参加した他クラスの学生50名ほどである。このうち、筆者担当クラスの学生（一部）62名に、1学期（4か月）終了時点で行ったアンケートの結果では、この会話練習が「とても役に立つ」「役に立つ」と答えた学生があわせて53名（85.5%）であった。また、会話練習が「とても好き」「好き」と答えた学生があわせて48名（77.4%）であった。

会話練習が「とても好き」「好き」と答えた学生の、好きな理由として以下のような記述がみられた。

- ・日本人と話すとき、話す日本語（方言？）を聞いた。授業中では、標準語を勉強している。この両方の違いどころを比べて、おもしろかったと思う。
- ・私の思いはことばのべんきょうは本を見てべんきょうするのもじゅうよ

うだけど日本人といっしょうに話すのがもつとだいせつだと思う。ともだちと話してもいいけどげんかいがあると思う。だからとし上の人とは話すのがやくにたつと思う。

- ・別府のひとはしんせつです。そして会話練習をできました。
 - ・別府の人と話したことがありませんでしたから、あたらしいけいけんでした。別府の人とたのしいじかんをあつたから、とってもおもしろかったです。
- (すべて原文のまま)

学生が不満に感じる点としては、「同じ年代の人と話したい」、「話し方が早すぎてわからない」「難しいことばを使う」等がある。しかし、異年代の「普通の」日本語を話す地域の人々と触れあうことがこの会話練習の目的の一つであることを考えると、こうした不満は解消しなければならない問題点とはいえないと思う。

一方、会話練習に参加した地域ボランティアの感想には以下のようなものがある。

- ・とても楽しかった。
 - ・学生の学ぼうとする姿勢がよい。
 - ・若いエネルギーに触れられてよかった。
 - ・留学生も日本の学生と同じ若者なんだと感じた。
 - ・学生と話すことは楽しいがなかなか意思が通じないもどかしさもある。
- しかし、お互いが理解しようと努力することに意味があるのだと思う。
- ・短い時間にいろいろな国の人、文化などに触れることができ、よい刺激になった。

このように、ボランティアをするというより自分自身が楽しんでいる、勉強になった、いい経験だった、というような感想が多い。

また、参加者には授業の最後に用紙を配布して、今後も協力してもらえる場合には住所氏名を記入してくださいとお願いしているが、ほとんどの場合快く記入してくれる。感想の欄にも否定的なものはなく、次回も楽しみにしていますというものが多い。授業のたびに新しい参加者が増えるのも、一度

参加した人が友人・知人を誘ってくれるからである。さらに、ボランティアの参加者が教室外で、学生を家庭に招いたり、買い物や観光に連れて行ったり、メールを交換したりといった交流も生まれている。

こうした状況を見ると、この地域ボランティアの協力による会話練習授業の試みは、地域の中に学生が受け入れられる環境を作るために多少なりとも役に立っているのではないだろうか。

3.5 会話練習授業の問題点と今後の課題

以上のように地域のボランティアの協力を得て、授業のなかで会話練習を行ってきたわけだが、この試みは、学生、地域ボランティア双方から有益なものであるという一応の評価を得ているようだ。

ところが現在のやり方でこの授業を続けて行くのは次第に難しくなっている。その原因には以下のような点があげられる。

① ボランティアの把握の問題

地域ボランティアグループといっても、前述のように、地域の人々の自発的な申し出によるものではなく、こちらからお願いして来ていただいている形のものである。そのため、名簿の管理、連絡等グループ全体の状況の把握を担当教員（筆者）一人で担わなければならない。30名足らずの名簿搭載者で始めたのが、会話練習授業を行うたびに新しい参加者が少しずつ増えて現在は91名となり、今後も増え続けていくことが予測される。連絡は主に予算の関係で、Eメール、FAX、はがきという複数の手段を使っており、1度の会話練習のためにかなりの事務量になっている。

また、事務作業量を少なくするために、連絡は一方通行で、出欠の確認までは行っていないので、当日になるまで参加者数がわからず、予想外に少なかったり、多かったりという問題が起こる（現在はありがたいことに多数の参加者があり、学生の数よりもボランティアの数が多くなってしまいうことが一番の問題となっている）。

また、自発的ではないボランティアという性格上、地域からの参加者が受け身になってしまうという問題がある。

② 授業でのスケジュールの確保の問題

この大学の日本語コースは、2年間で、まったくのゼロから日本語1級80%レベルをめざしており、1コマ（95分）の学習の密度が高い。初級の授業は文法を中心に学びながら、話す・聞く・書く・読むの4技能を習得させるもので、それぞれの技能や日本事情のための特別な時間設定はない。

そのなかで地域のボランティアとの会話練習の時間は、現在の1学期3回程度が精いっぱい、日本語学習に实际的な効果を期待できるほどではない。あくまでも補助的な、学習の動機付けや地域とのコミュニケーションを図るという位置付けにならざるを得ない。日本語教育という立場で考えると、どこまで意味があるのかという疑問もでてくる。

これらのなかで特に大きな問題となるのは、日本語教育という枠の中で、労力に見合うほどの学習効果があるかどうかということだと思う。確かに日本語の学習という点で考えると、この会話練習でめざましい効果が得られるとはいいがたい。学生のアンケートの中には「敬語の使い方がわかった」という感想がみられるが、敬語に関する学習は4ヶ月のコースのなかでは、それほど大きな位置をしめるものではない。

しかし、日本語教育の意義を考えてみたとき、学生がどのように流暢な日本語を身につけたとしても、日本語を学び日本語で話すことの楽しさを感じていなければ本当の意味で日本語の教育が成功したとはいえないのではないかと思う。町を歩いていて塩をかけられたり、暴言を投げつけられたりした学生たちが、喜びを感じながら日本語を学ぶためには、地域の人々に受け入れられ、ともに生活していける環境作りが必要であろう。学生の側にも地域の人々の優しさや親切さにふれる機会として貴重な体験になるのではないかと思う。この地域ボランティアの参加による会話練習授業が、そうしたことに少しでも役に立つのならこれからも続けていきたいと考えている。

参考文献

梶原綾乃 (2003) 「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」 日本語教育117号

(ほんだ あきこ)